超越的リアリズム
——「今」に内包される現実としての未来

上田岳弘

果たしてその作品は「文学」であるのか、「物語」であるのか。時々、そんな議論が持ち上がることがある。たいていは後者に対して批判的な文脈で。例えば、それはただの「物語」であって、「文学」ではないという風に。

しかし、実際のところその二つを厳密に分けることなどできない。文体の冒険、かつてない手法、テーマの新しさ、あるいはこれまでなかった切り口を含むもの、それこそが「文学」であるという言い方はできるかもしれないが、そこに登場人物が存在し、いや、登場人物がおらずとも、何らかの描写があり、ある一文を受け止めて次の一文が紡がれ、そしてその文章がまた次の文章へと連鎖していけば、おのずとそれは何らかの意味を成し「物語」を内包してしまうものだろう。

逆に純然たる「物語」を書こうとしたとき、今語られるべきものであるべしと作者が欲したならば、自然とアクチュアリティを内包し、それが新しい手法、新しいテーマを呼び込むものだろう。「文学」と「物語」を完全に切断し別物と扱うことはできない。作品ごとに多寡はあれど、重複し、あるいは補い合っている。

ガルシア・マルケスの『百年の孤独』を読むとき、読者はそこに死者が平然と生者と会話をし、雨の代わりに花が降る世界を見る。現実にはあり得ない光景である。それはファンタジーと呼ばれてしかるべき光景だ。

あるいはヴィクトル・ペレ―ヴィンの『恐怖の兜』を読むとき、当時はただの空想だった現実世界と寸分たがわぬ高精度のヘッドマウントディスプレイやVR・AR技術をモチーフにしていることを発見するだろう。それはSFと呼ばれるべきものかもしれない。

しかし、それらはそれぞれ、ファンタジーでも、SFでもなく、「マジック・リアリズム」、

「ターボ・リアリズム」と評され、あるいは自称される。私は、このリアリズム、という文言こそが作品の志向をみるのに重要であると考えている。

リアリズムとは、現実主義、または写実主義と訳される言葉だ。いかに通常はあり得ないファンタジックなものごとが含まれていても、SF的技術が作品世界に組み込まれていたとしても、あくまでそこに描かれているのは「現実」であるとする姿勢を表現する言葉が、創作における「リアリズム」であり、ファンタジー的もしくはSF的であるように見え、事

実として現実の世界に存在しないのだとしても、「リアリズム」を名乗るとき、そこに表現されているのは、「こうであるかもしれない、もう一つの現実」なのだ。

ちょうど10年前、私は「太陽」という作品でデビューした。（中国では『太陽・惑星』新星出版社により2022年に出版された単行本に所収された）これは、宙に浮かぶ天体であるところの太陽を刺激して、核融合を進めて太陽系全体を金にすることを画策する大錬金の顛末を描いた小説だ。この作品は、昨年渋谷のパルコ劇場で上演された、俳優の高橋一生氏の初の独り舞台『2020』の基礎の一つともなった。そんな、現実には存在しない科学技術を道具立てにして超未来を描いた作品でデビューしたものだから、SFと文学の違いについて新聞記者や雑誌記者から訊ねられる機会が多かった。訊ねられるまでは明確な基準は私の中でもなかったのだが、訊ねられてその都度思考し返答を繰り返す内、自分の中でまとまっていくものがあった。

端的に言いあらわすとすればこうなる。

「科学技術が自ずと促す人間存在の変容をも勘定に入れているのが文学。

SF的なガジェットに囲まれた生活を今のままの人間が送っているのがＳＦ」

この区分けでこれまでの諸作品をみたとき、当然SFだととらえられていた作品に文学性を見出すことは多々あるだろうと思う。

2013年に「太陽」を発表した時、大江健三郎氏も原稿を寄せていたことのある朝日新聞紙上の文芸時評コーナーで、作家の松浦寿輝氏が本作の作風を超越派と評された。それを受けて、二作目となる「惑星」（同じく『太陽・惑星』新星出版社所収）に超越的リアリズムという言葉を入れ込んだのは、私なりの意志表明だった。つまり、いかにSF的なガジェット、未来描写、現実には存在しない現象にまみれた作品であろうと、私が志す創作はあくまで「リアリムズム」であるという。

言葉とは強いもので、一旦自分の中でそう整理がつくと、現実にはあり得ない、未だないものを描くことに躊躇がなくなった。続く第三作『私の恋人』（2022年　新星出版社刊）では、クロマニヨン人が生存した石器時代から21世紀である現在まで転生を続ける人間を主人公として、AI時代到来の懸念を描き、『塔と重力』（2022年　新星出版社刊）ではITの過剰な発展にともなう意識の共有が進む現代における恋慕を描いた。

かつては夢や妄想の類であった未来科学技術が現実になり、人間存在の変容をうながす今、現実に錨をおろし、なおリアリズムにとどまること。

それが、これまでの私の創作のテーマであり楽しみである。もしかしたら、今書かれるべき文学の一種であるのではとも思う。

（作者紹介：作家、第160回芥川賞受賞）